都市と後背地

―生存の基盤と生活の基層―

木下　聖三

目　　次

1．後背地という概念
2．都市中枢的なものと後背地的なもの
3．必要な過剰
4．都市文明の逆説

1．後背地という概念

後背地とは、港湾の背後にある陸地で、港から積み出す物資を供給する範囲や、港に陸揚げされる物資を需要する範囲を指す地理学の概念であるが、広くは、都市の勢力が及ぶ範囲をも指す。この概念は近年、文化人類学者の阿部年晴によって、意味範囲のさらなる拡張が図られている。都市文明を形成する基層を指し示す用語として、この概念を鋳直すことによって、人類史の中に近代文明を位置づける作業に供しよう、というわけである。

これまでにも社会学が都市と村落を対置し、両者を概念化することによって、同様の作業に取り組んできた。しかしこの対概念には、近代と前近代という段階論的な性向が付与され、したがってその議論も都市化を内実とする近代化に寄与こそすれ、ベクトルを相対化する役割は果たし得なかった、と言える。

以下、阿部の議論を敷衍しつつ、後背地という概念の拡張によって得られる近代像の素描を試みる。

2．都市中枢的なものと後背地的なもの

阿部は後背地論の冒頭（「後背地から……」阿部他編『呪術化するモダニティ』[2007:351]）で、実体概念としての「後背地」と分析概念としての「後背地的なもの」とを分けている。これらが分けられるべきであるならば、両者に対応する「都市文明」と「都市中枢的なもの」とも分けられるべきであろう。

阿部は「後背地的なもの」を形容するに、「〔それは〕人間が人間であるという事態を再生産する」[2007：352] と述べている。単に「人間を再生産する」とは言わないのである。あるいは「〔その文化は〕文化的動物としての人間の生産と再生産を中心に据えた文化」[2007：358] である、とも述べている。これも単なる「動物としての人間の生産と再生産」ではないのである。これらの表現から「都市中枢的なもの」が炙り出されるように見えてこよう。

つまり、「都市中枢的なもの」は、いわば（文化的動物ならぬ）自然的動物としての人間を再生産する。これは「都市文明」と言えばまず、蛇口を開けば当たり前のように水が出る、といったインフラストラクチャーが想起される、そのイメージにも合致している。「後背地的なもの」が、文化的動物としての人間の生活（古代ギリシア語の「ビオス」）を可能にするのに対して、「都市中枢的なもの」は、自然的動物としての人間の生存（古代ギリシア語の「ゾーエー」）を可能にする、というわけである。

古代ギリシア語の「ビオス」と「ゾーエー」という言葉の区別を強調したのは、ハナ・アーレントであった（『人間の条件』[1994：152－153]）。

「社会は動物がみずからの死すべき運命を知ることを阻むものとして生じ、文化はそれを知る人間の対応として生まれている」という、クロード・レヴィ＝ストロースの言葉（「人類学の未来」

［2009：31］）に従うならば、「都市中枢的なもの」を「社会」、「後背地的なもの」を「文化」、と呼ぶこともできよう。レヴィ＝ストロースはさらに、「文化のない社会は考えられても、社会のない文化は考えられない」、と述べているが（「人類学の未来」［2009：31］）、これは本稿第４節の議論を先取りする言葉となっている。

文化は都市でこそ華やぎ、人間の自然（「ヒューマン・ネイチャー」）は後背地でこそ躍動するのかも知れない。しかし、そのような価値判断含みの見方は都市と村落を対置する概念枠を補強するばかりで、それは「近代的な、あまりにも近代的な」（阿部「後背地から……」［2007：351］）絵図でしかないのではないか。

何処に何を宛がうかが問題なのではない。都市に「後背地的な」様相を見ることはできるし、後背地に「都市中枢的な」様相を見ることもできる。まずは、この平凡な事実を見逃すまい。都市にも後背地にも「都市中枢的なもの」と「後背地的なもの」は備わる。それぞれの場所で、「都市中枢的なもの」と「後背地的なもの」がいかに関係しているかこそが問題なのである。

３．必要な過剰

さて、私たちは生きるために、水を必要とする。中村哲と彼を支援する「ペシャワール会」の活動に見られるように、私たちはまず、生きるに困らないように、上水道を整備するわけである。水に比べれば日々の生活様式など、取るに足らないものであるようにも思える。事実、私たちはとにかく、人間の生存（「ゾーエー」）を確実にする「都市文明」の構築に邁進してきた。しかし、それがある程度以上の水準に達すると、つまり、飲み水の心配をしなくてもよい段になると、徐に人間の生活（「ビオス」）が問題化する。

もちろん、中村の活動する地域の惨状は決して人間社会の原状などではない。単なる「都市中枢的なもの」の欠如態でもない。むしろ、「都市中枢的な」論理の貫徹による、「都市中枢的なもの」と「後背地的なもの」の隔絶した社会様態と見るべきである。原状において「都市中枢的な

もの」と「後背地的なもの」は不可分な関係にある、と措定する阿部後背地論に照らすならば、かの惨劇もまた「都市化」なのである。

あくまでも「徐に」。問題に目をつむって、さらに人間の生存（「ゾーエー」）を容易にすることに力を注ぎ続けることもできる。そうして、あくまでも論理的な可能性に過ぎなかった、動物としての生存（「ゾーエー」）と人間としての生活（「ビオス」）との分離が、現実に可能な段階に入っているわけである。

阿部も「〔感情や欲望や能力において過剰や逸脱を示す人物や、そのような人物に共感を抱く多数の人びとがいる〕そこにすでに、多数派の「普通の」人びととその日常生活という「後背地」と、そこから逸脱しようとする異質な「何か」との分離が可能態として存在しているのだ」と述べている［2007：353］（下線は木下による強調）。これを本稿の文脈に引き込みつつ、言い換えるならば、「ゾーエー」と「ビオス」の結合態たる後背地においては、「ゾーエー」と「ビオス」の分離態自体が異質な様相なのである。

「オタク」（リーダーならぬフォロワーとしての「オタク」）や「引きこもり」はその先鋭的な形態であり、両者（「ゾーエー」と「ビオス」）の分離した人間像は、梅田望夫と平野啓一郎によって「ウェブ人間」と名付けられてもいる（梅田／平野『ウェブ人間論』［2006］）。

「ウェブ人間」とは差し当たり、「ネットの世界に住んでいる」という感覚を有し、インターネットに依存した生活を送る人々を指し示す言葉である。シリコンバレーに住まう梅田にとって、「アメリカに帰る」と「ネットの世界に帰る」は同義であり、それほどまでにインターネットの世界は「リアル」なのだ、と言う（『ウェブ人間論』［2006：15］）。これを受けて、平野は「言動によって結び合わされた人間関係は「ウェブ」と呼ばれ、それは物質的な世界と同じくらいリアリティを持つ」と述べたアーレントの仕事（『人間の条件』［1994：297］）を参照しつつ、現代のウェブはその物質化形態ではないか、という見方を提示している（『ウェブ人間論』［2006：52］）。また、梅田が「電力供給と同じように、ネットがいきなり止まることを疑う必要などないほどに環境が

進化した社会になれば、個としてはサバイバル力が弱くなっているとしても、〔島宇宙に充足する〕そういう変容があってもいい」と述べると、平野も「オタクというのは、そういう時代の象徴的な現象なんですね」と応じている（『ウェブ人間論』［2006：186］）。この対談では、生存の心配に囚われない人間の生活の仕方が議論されている、と言えよう。

人間が生きるために水が必要であるのとは違う、人間が人間として生きるために必要なものとは果たして何なのか。黒崎宏は、あるものに必要だが同時にそれには属さない事柄を「必要な過剰」という言葉で表現した（黒崎『言語ゲーム一元論』［1997：85－86］）。人間として生きるために必要な何ものかは、人間にとってまさに「必要な過剰」であろう。水などとは違って、それが無くとも（動物としてならば）生きてはいけるのだから。

「後背地的なもの」は「都市中枢的なもの」に比べると余分な、したがって過剰なものであるが、それこそが人間が人間として生きるために必要なものである。この「必要でありながら過剰である」という辺りの機微は、「後背地」から「後背地的なもの」という分析概念を取り出すなどの操作があって、はじめて見出され得るのである。

（あるいは、「都市中枢的なもの」の方こそが、人間にとって「必要な過剰」なのかも知れない。というのも、人間の本質が人間としての生活（「ビオス」）の内に存するのだとすれば、動物としての生存（「ゾーエー」）の方こそが、人間にとって（必要であると同時に）余分な要素であるに違いないから。

４．都市文明の逆説

国家を典型とする大規模組織たる「都市文明」に対して、家族を典型とする「後背地」こそが（とくに生活「ビオス」において）基層的である、にも関わらず、こと動物としての生存（「ゾーエー」）に当たっては「都市中枢的なもの」こそが基盤となる（この逆説こそは阿部の言う「文明的転倒」［2007：355］に相当する）。かつて社会の基層と基盤とは不即不離であったが、両者

は分離し得るし、現実に分離しつつある（ゆえに阿部の言う「文明の無知」［2007：355］を来たすのであろう）。

阿部は後背地の構成要件として、持続的な対面関係を挙げる一方で、それはレヴィ＝ストロースの提唱した「真正性」概念に関わる、とも述べている［2007：390］。「真正性」という概念は近年、小田亮がその再導入の必要性を説いている（「真正性の水準について」［2008］）。小田によれば、それによって、「近代社会以降、ひとは、真正な社会と非真正な社会という二つの社会の様相をいわば二重に生きている」ことが明らかになるのである（「二重社会」という視点とネオリベラリズム［2009］）。対面的なコミュニケーションの有無で判ぜられる「真正性」は、すなわち後背地と都市文明を分ける基準であり、したがって、「後背地的なもの」と「都市中枢的なもの」の二重性は、小田の指摘する近代社会の二重性と重なるものであろう。

人は結婚しなくても生きていけるし、葬式をしなくても死んでいける。「オタク」や「引きこもり」の存在は、にも関わらずなぜ、人は結婚し、葬式を執り行なうのかを問うているように思う。「呪術」や「迷信」が訳の分からない習俗に対して宛がわれた蔑称だとすれば、結婚や葬式といった、平凡であるはずの習俗までもが、彼らにとっては今や、「呪術」や「迷信」と変わらないものと化しているように思われるのである。

そして、こうした事態の出来は誰のせいでもなく、人間に本来的な二重性に起因するのではないか。人間は（文化的動物としての）人間でありながら（自然的）動物でもある、という二重性に。これらは常に分離し得る。これらの分離は果たして、危機なのであろうか、それとも好機なのであろうか。

阿部も次のように述べている。「社会が重層化し大規模化する過程は、人間がますます人工環境への依存度を高め、直接的な自然環境からの離脱を進める過程である。これを自然からの逸脱（非行）と見るか、そう見るのこそ「自然というお釈迦様の手のひらに乗っている」ことに気付かぬ人間の高慢だと考えるかは、判断の分かれるところであろう」［2007：354］。

生存さえ危ぶまれる状況下にあっては、社会の基層を成さずして社会的基

盤の構築など叶わない。中村は、危機的な状況の中で人々が社会的基盤を構築する姿に、普段忘れられがちな社会の基層を再発見することができる、と言っているように思う。

しかし、自然的動物としての生存が危機にあるときには、人間が人間でなくなってしまう気もする。生存の危機からの解放と、その結果としての社会の基層と基盤との分離について、梅田は明確に肯定している。

阿部も次のように述べていた。「後背地に胚胎する、より大規模な上位社会の萌芽は、創造性の表れと見ることもできるが、同時にそれは、後背地の観点からすれば一種の逸脱であり、その意味で「非行」と呼びうるものだ」[2007：353]。梅田はそこに「創造性」を見る者であり、中村はそこに「非行」を見る者なのである。

多分、次のようなのであろう。すなわち、「都市中枢的なもの」が確立していないときには、人がそれを確立する、まさにそこに「後背地的なもの」を醸成し、「都市中枢的なもの」が確立しているときには、人は「後背地的なもの」を（ウェブ上など）別のどこかに求める。

もちろん、ウェブ上に「後背地的なもの」があり得るのか、問われて然るべきであろう。人間を（文化的動物としての）人間たらしめるものの探索こそは（自然人類学ならぬ）文化人類学に中心的な問題であるに違いない。

アーレントも「人間の条件〔ヒューマン・コンディション〕というのは人間の本性〔ヒューマン・ネイチャー〕と同じものではない」と指摘している（『人間の条件』[1994：22]）。

付記

本稿の作成に際して、阿部年晴先生からコメントを賜った。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

先生の問題提起に対して、現在の私には答「案」すら提出できない。問題を（私の解する限りの）問題として再提示するに留めざるを得なかった次第である。

文献表

阿部年晴／小田亮／近藤英俊編
　2007 『呪術化するモダニティ―現代アフリカの宗教的実践から』風響社
アーレント（Hannah Arendt）
　1994 『人間の条件』（志水速雄訳）ちくま学芸文庫
梅田望夫／平野啓一郎
　2006 『ウェブ人間論』新潮新書
小田亮
　2008 「真正性の水準について」『思想』1016
　2009 「「二重社会」という視点とネオリベラリズム―生存のための日常的実践」
　　『文化人類学』74－2
黒崎宏
　1997 『言語ゲーム一元論―後期ウィトゲンシュタインの帰結』勁草書房
レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）
　2009 『パロール・ドネ』（中沢新一訳）講談社選書メチエ